

平山の怪力もさることながら、本田親父がそんなにもやせていたということだ。

その本田親父が怪我をしたのはシボレット工場の建設現場でした。

そのとき、私は他の現場に行っていて、居合わせませんでしたから、くわしいことは知りません。

足場から落ちたともいいますし、高所から落ちてきたバタ角が当たったとも聞きました。

要するに腰の骨を強く打って、しばらく入院しました。

李家の長男

酒癖は悪かったけれど、根っからの悪人では勿論、決してありません。

いい人でした。

酒焼けと陽焼けで赤黒い肌、思いきり飛び出した頬骨、その奥にギョロリとした目、そして大きな口。

お世辞にも人相がいいとは申せません。

しかし、この人が笑うと、とても人なつこい笑顔になって、どことなく気の弱ささえ感じられました。

若い衆たちを可愛がって、松本親方には内密で残業の分増しをつけてくれたり、コマワリもよく切ってくれま

した。

それでいて仕事にはきびしい人でした。

松本親方にとっては「頼りになる」人だったでしょう。酒癖の悪ささえ我慢すれば。

本田親父の怪我は思ったより軽かったようです。意外と早く退院しました。

と、喜んだのも束の間でした。

退院してからの言動が、どうもオカシイのです。

さっそく現場へ出て、入院以前のように工事の指揮をとるようになりましたが、体の動きが何となく鈍いのです。

それは怪我で入院した後ですから、すぐにはもとにもどらないだろう。しかし何日かたてばきつと、と誰もが思っていました。

そうではなかったのです。かえって毎日に悪くなるようになってした。

足場の上でも敏捷に動いていた人が、平地でさえノロノロして、足もとも危うく見えるのです。

イヤ、鈍くなったのは動作だけではありません。頭の切れ味まで鈍ってきました。

大酒飲みでしたから、二日酔いだろうと思っていましたが、どうもそれだけでは足りないのです。

そのうちにオカシナことを口走ったりするようになりました。

「仕事の段取りは本田親父」

と言われて、若い衆から尊敬されていた人が、素人もしないような失敗や、間違いをするのでした。

仕事の段取り——それは言うなれば作戦計画です。

掘り方でも、コンクリ打ちでも、その時々々の仕事について、いろいろな条件を検討し、方法を考え、道具や、機械をえらび、材料をえらび、その条件に適した最上の段取りをつけることが、仕事をより早く、より完全に、より少ない労働力でしとげることにあります。

段取りの上手な親方や、世話役は、部下から信頼されその指示にためらいなくしたがうようになります。

本田親父はそういって人でした。

この人の段取りなら間違いない。間違いないかある答がない。目かくしされてもついて行く位に、みんなが思っていました。

それがそうではなくなったのです。

「どうもオカシイ」

「ヤキが通った」

「アル中が頭に来たんじゃないか」

そんな言葉が、若い衆の間で、始めは遠慮がちにヒソ

ヒソとささやかかれ、やがて遠慮の戸をとりはらって、公然と語られるようになりました。

その頃にはもう、仕事の段取りだけではなく、日常生活でも「オカシナこと」ばかりになりました。

そして或る日、本田親父の姿は私たちの前から消えました。

その行先について、松本組の幹部たちは口をつぐんで語りません。完全黙否です。

だが、言わず語らずとも、若い衆はそれと察し、うなずきあっていました。

ずつと後になって、病因はアル中などではなく、腰を打ったアノ怪我のときに、背髄をやられたためと、聞かされました。

ご承知のことと思いますが、背髄は脳とともに中枢神経を構成し、これを犯されると知覚や運動が麻痺します。本田親父の場合は、次第に患部が脳にまでひろがっていったのだそうです。

鉄格子の窓がある病院。

それが彼の行先でした。

本田親父がどんな風になつたか。

また、その病院に入ってから、見舞いに行つた人が伝えてくれた話。

今、私はそういうことを、もつと具体的に書かねば、
証者に現実感をお届けできないのではないかと
なやんでいます。

しかし、やはり書けません。

ただ、かつてあれほどの「秀才伝説」を栄光のように
背負っていた人が、その末路がこうであった、と知って
いただければそれで十分だと思ふのです。

本田親父には二男一女がありました。

長男の隆夫は、父親に似て色が黒くやせていましたが、
かしくせうな顔をしていました。

隆夫は父親の方針で朝鮮人学校に行っていました。

朝鮮人の子が朝鮮人学校に通学する——何の不思議も
ない当り前のことのようにですが、私はそのことに、本田
親父の朝鮮人としての誇りのようなものを感じるのです。

松本親父の長男も、平山親父の一人息子も、隆夫と同
い年でしたが、ふつりの日本の学校に行っていました。

在日朝鮮人の子弟にとって、どちらがふつりであるの
か、統計的な数字の上のことは私には判りません。

けれども、私のせまい見聞では、日本の義務教育を受
ける子弟の方が多いように思われます。

そのせまい見聞から結論を出すのは独断的かもしれま
せんが、現に松本でも、平山でもその息子をせうしなか

つた事を考えると、本田親父が隆夫を朝鮮人学校に通わ
せた心の底に、熱い感情がこもっていたような気がして
なりません。

前に私は、李家の先祖は、朝鮮の富裕な名家ではな
ったか、という推理を長々と書きました。

その推理が正しいとして、それと隆夫の教育のことを
考えあわせると、どうしても「李家の長男」の誇りとい
りか、意地というか、せういりものを感じないわけには
ゆきません。

考えてみて下さい。

本田親父——李家の長男は在日朝鮮人二世として日本
で生まれ、そのときは日本国籍だったのが、日本の敗戦
で韓国籍となるといり、彼自身の意志とは直接関係ない
運命をたどっています。

その間に、北野中学という大阪屈指の名門校を卒業し、
生涯「秀才伝説」を背負って生きました。

それでいて、学者にも、政治家にも、大富豪にもなれ
ず、たかだか小さな土産業をいとむ弟の腹心にすぎぬ
立場で終りました。

それも、かつて自分が住んでいた土地に建つ工場の建
設工事に従事していて、不慮の怪我が因で、鉄格子の病
院へ送られることになったのです。

自分の住む場所さえ、一度も自由にならなかったわけ
です。

人間の運命なんて、えてして、そんなものだと言っ
てしまえば、それまでですが——。

「李家の長男」は、その後数年生きました。
生きていた、というより、屍人としての彼は時のすぎ
ゆくままに、身をゆだねていたとでも言うべきでしよ
うか。

一度も道意町の飯場にはもどりませんでした。
残された人

残された人

本田親父——この人ほど、おっとりした人柄を、私は
他に見たことがありません。

前に、この人が炊事場で洗濯をする話を書きました。

「赤ん坊のおしめを洗った流して食器を洗うんやから」

その無頓着ぶりは大したものですよ。

おまけに本田親父が、誰彼なしにからむ酒乱ですから、
その飯場に労働者が居つかぬのも無理はありません。

しかしながら、どうにも憎めないのが本田親父です。
ふっくらした大柄な体つきや、いつも春風が吹いてい
るような何とものどかな、色白で可愛らしい顔、それに

もまして、ゆったりとしてこせつかぬ起居振舞。

「だらしない」

と言う人もいました。

なるほど、水商売出身という噂があつて、その噂が
それなりにうなづける松本親父は、おしゃれも相当なも
ので、いつ見ても呉様然とした様子を崩したことがあり
ません。

よほどのことがない限り、盛装した姿を見せたことの
ない平山親父も、目をみはらせるような外出姿を見たこ
とがあります。

それよりも、平山親父はふだんのキリッとしたエプロ
ン姿に一分のスキもない人です。キビキビした動作と共
に清々しい好感がもてるのです。

ところが本田親父ときたら、奥様風のおしゃれもした
ければ、世話女房風のキリッとしたところもあります。

「ずんだれている」

と誰かが言いましたが、いつも粗末なものを身にまと
い、しかも、着こなしが下手で、しまりがありません。

少しオーバーな言い方をさせてもらえば、「ボロを引
きずっているよう」なのですが、それさえ無頓着なので
す。
せういり人でしたが、私はこの人に、軽蔑とかの悪感

情はもてませんでした。

むしろ、ほのぼのとした好感めいたものを持ちさえしました。

本田親父がまだ元気だった頃、例の酒乱で家の中で暴れるので、姐御が三人の幼児を連れて外へ避難しているのをよく見ました。

一寸した世話話なのですが、それが少しも悲劇的な哀れっぽさを感じさせないのです。

もともと肥満体の人には、哀れっぽさよりユーモラスな笑気の方が多いかも知れません。

でも、この人の場合は、それとは別の独特なムードがありました。

突然、こんなことを言いたすのも何ですけれど、私は、本田姐御は生まれつき貴族的な人だと思いのです。

昔の貴族、たとえは将軍家とか、大名家の人たちは、風呂に入っても一切自分の手は使わず、家来や女中に体を洗わせたそりです。

衣服を脱ぐのも着るのも、すべて人まかせです。ふつりの人、下々の人間なら恥ずかしがるころも、平気でさらけ出して。

本当の貴族というのは、たぶん、そんなふうに大らかであつたらうと思ひます。

した。

その姐御と、子供たちを残して、本田親父は鉄格子の病院に入ってしまったのです。いつ退院出来るか判らない、イヤ、おそらく一生帰らないであろう入院なのです。

これから先、どうやって暮すのでしよう。

平山姐御のよりな人なら、もしこんな立場になつても、不幸をはね返して生きて行くでしょう。松本姐御だって、河とかそれなりの才覚がありそりに思えます。

それにひきかえ、本田姐御だけは、そんな智恵も才覚も、ありそりに見思えません。裸で街に放り出されたお姫さまみたいな人です。

どうなるのだろうと心配でした。

むろん、当分は松本親父がこの一家の面倒を見るでしょう——事実、そりなりました——が、いつまでもそりいうわけにはいきません。

本田の長男の慶夫は中学生でした。

この一歳の中で、彼だけが朝鮮人学校へ行っていました。朝鮮文字の読み書きは、だから彼と平山親父が最も通かでした。

が、それがこの場合、何の役に立つといふのでしよう。

彼の従兄弟たち、松本の長男も、平山の長男も同じ年令でした。従兄弟たちはエレキバンドに夢中でした。

本田姐御の、だらしないほどの大らかさには、そりいう貴族の威厳ささにはないあり。意気がありました。そり解釈すると、この人が家来一切に不得手なものも納得出来るように思えます。

これまで、私はたびたび平家良家であつたに違いないと推理してきました。たとすれば、その季家の長男に嫁入りしてきた人も良家の出であろうと推理するのも自然ではないかと思ひます。

解では、古代から、両班、中人、常民、賤民の四階級の社会的身分があり、その区別を厳重に守つて、結婚もほかの階級にわたつてすることを厳禁していました。日本の士族工部より、もっと厳しい制度だつたようです。

一見、だらしがなく見える本田姐御には、そりいう貴族的なところを感じました。

松本姐御は、美人で良家の奥ゆきとした所がありました。た。ただし、どこやら付焼刃の匂いがしました。

勇まざりの平山姐御は、上品ぶつた真似は小指の先ほども出ませんでしたが、てきげきと動いて、世話女房というよりは正しく娘の姐御でした。

それと、本物の貴族を感じさせる本田姐御は、何事にも無難で、大らかすぎて、世にには不向きで

松本の長男はエレキギターを買いました。平山の敏夫もドラムを買いました。その頃、平山の家計は決して楽ではなかつた筈でしたが、一人息子を目の中に入れても痛くないほど可愛がついていた姐御が無理をしたのです。しかし、慶夫にはそんなぜいたくは許されません。一家の柱が倒れて、叔父の厄介になつて身の上です。そして、従兄弟たちは高校進学です。あの勉強の学校への敏夫でさえです。

「金ならいくら出してもいいから」

と、盲目的母性愛の平山姐御が、私に裏口入学を頼んだ話は前に書きました。

同年令の従兄弟たちを、社夫がうらやましく思つたとしても、無理はありません。

慶夫は、進学どころか、中学を卒業するとすぐ働かなければなりません。松本姐御の土工として、骨細い少年は荒くれた大人たちにまじつてカードを押ししたり、スコップを握つたりしたのです。

いくら叔父の手もとで働くといつても、少年の身にとつて土方仕事は重労働です。現場で大人たちが彼をかばたのは言ひまでもありませんが——

それにしても、少年の働きでは収入はしれたものです。それで一家四人の生計を立てねばならないのです。

不逞でした。

重荷でした。しかし、色の黒い、やせっぽちの少年は健気でした。精一杯にツッパっていました。

父親の入った病院が病院ですから、世間がいくら好奇心のまじった目で彼を見ることもありません。

実際には、そんなことは本人が気にするほど世間や、飯場の大人たちにも知られていなかったのですが、隆夫はそう思っています。

思いつくしの一人相撲と知らずに、世間の好奇心に反駁しました。

大人たちに同情されればされるほど、かえって反抗的になりました。

大人の中にまじって、大人に負けまいとする無理な背伸びがありました。

そういう年頃というのは、誰にもあるものでしょう。

隆子はどの年の遠く大人にケンカをふっかけたり、スナック喫茶に入りびたりになったりして

「隆夫はひねくれている」

「ぐれてる」

と、飯場の大人たちの中には眉をひそめる者もいました。

が、もともとは無口でおとなしい、自立できない子供だったので。

それが、この時期に急に変わったのは、やはり父親の入院という出来事が、複雑で濃い影を彼の内部に落したためでしょう。

頭の良さでは松本の長男の方が、体力では平山の一人息子さんの方が、隆夫よりたしかにまさっていました。

しかし、隆夫にしてみれば、従兄弟たちに劣っているなどとは思えなかったでしょう。それに、自分はこの一族の本家の長男なのだという、ひそかな自負もあったのかもしれない。

それが一方はエレキギターや、ドラムに狂い、そして高校に進学したのに、一方は大人たちにまじって働かねばならないのです。

そういう子が少しくらいくれたからと言って、やたらと責められもありません。人生長い目で見れば、人それぞれにいろんなことがあるものなのです。

長い目で——と言えば、松本の長男も、平山の一人息子も、せっかくの高校を一年かそこらで退学してしまっただのですから、隆夫がその進学をうらやんだり、ひがんだりしたのも、何やら無駄なことのようになっていました。

そして、この三人の従兄弟たちは、松本親方の方針で、

三人とも松本組の重機のオペレーターになりました。

高校を中退する位だから、二人の従兄弟も知能優秀、品行方正というわけではありません。

その中では、松本の長男が頭も良いし、何事にも常識的で、坊っちゃん育ちのおっとりした性格でした。

平山の一人息子は、父親ゆずりの大きな体と人なみ以上に強い腕力の持主だったので、ケンカのとときなど頼しい味方のようでした。

しかし、生まれつきこせこせしない性格の上に、甘やかされて育ったせいもあって、自分から他人にケンカを売るようなことはないようでした。

肉体的にも最も貧弱な隆夫が、かえって性格も烈しく、無鉄砲な行方も多かったのです。いや、性格が烈しいからでなく、肉体的にも、知的にも、更に境遇も劣っているから、そのコンプレックスをはね返そうとして、無鉄砲なことをしていた、というのが本当でしょう。

そして、そのために彼一人が目立ち

「ひねくれている」

「ぐれてる」

ということになったのでしょう。

が、そんなことを言われながらも、警察沙汰になるよ

うな事件もなく、月日が流れて行きました。

その間に、ブルヤ、ユンボをどろにか一人前に動かせるようになり、隆夫は自分の弟を高校へ進学させました。自分の出来なかつたことを弟にかなえさせたのです。

弟は、母親似の色白の美少年で、父親に似て頭の良い子でした。

(以下 次号)